

その10 北山杉に学ぶ



❶ 厳しい寒さの中で始まった北山杉の市(京都市北区中川・京都北山丸太生産協同組合) ❷ 競りを進めてゆく様子 ❸ 上から順に、縮緬丸太、磨き丸太、人造絞丸太、天然出絞丸太



私がまた小さかったころから、祖父はよく、北山杉の産地に連れて行ってくれました。その時、こんな話を話していました。

手入れが良い山は、風がよき。北山杉の皮も枝ぶりも美しい。寒い時期に絞りを何百本と巻いたり、ひとつひとつ皮をむき丁寧に磨きあげた北山杉。本当に手塩にかけて育てる。そんな川上の人たちの苦労を無駄にしないよう、川下売店も木を良く見て



北山杉の嫁入り(末永く愛されるよう木肌に磨き)

やさしいといかない。丸太を保管する部屋は、直射日光を入れないよう窓を「さき」(箱入り)にする。乾燥中は、湿度を気にしながら、背割れを少しずつ深く入れて面倒を見る。そして、お客さまが好みの北山杉を選ばれたら、その黄金色の肌を細粒で作った細たわしで丁寧に磨き、細のオールド紙巻きして化粧をしたら、紙巻きしてお嫁に出してやるんだよ。

「なんぞそんなに丁寧にするんじやないか」

それはね、北山杉はみんな、おじいちゃんの子供なんだよ。そのうちも特長があつて、かわい。だからお客さんのとこまで末永く愛されるように、こつこつと磨いて、お店から出してあげるんや。

「なぜ、北山杉が子供なんや」

木を求め、見る者は、すべて「親」なんや。立つ木を見守ってこそ、その成長を喜ぶことが出来るんや。

「親」っていつ漢字で、そつやと書いたことを思い出してあげて。

木林学

中川 典子

北山杉の産地は、北山おつが底冷えを招くよくな凍てつく寒さ。指先や耳もかたんでしまいます。そんな中「え、これなんぼおお」と低く響く声で、北山杉の市が始まります。

風格と伝統も競い合う場

市は、月に一度で、夏場は閉鎖しています。この寒い時期こそが、売れ時。市場に並ぶ北山杉は、ほとんどもが三尺の長さのもので、約三百本。この数で一日で売りさばくには二人の振り子売方が交代で、

テンボ良く、次々と競っていくかばななりません。私が初めて市場に来たころは、何を言ってるのか早口でわかりず、さらに買いたくても指先で値段を出すタイミングが合わず、思うように買えませんでした。

ちよつと、近くの中川小学校の子供たちが市場の見学に来ていました。地元の子供たちを間近で見ると、寒い中、いろいろな質問を聞いています。初めて来た人は、きつと誰もが売声の響きに不思議な高揚感を覚えます。やはり、競り合う市場は、一種の戦いの場なのです。



北山杉のおまかな種類は、磨き丸太、人造絞丸太、天然出絞丸太、面皮丸太、変絞丸太、タルキなどです。特に珍しいのは、「縮緬」と呼ばれる北山杉。天然に出来た絞が丸太の中へ中へと通達していくような景色。縮緬のような縮みに例えて、

住宅着工数が低迷し、北山杉を使う現場も減っています。自分たちに来る、新しい第一歩を踏み出したばかり。切ぎ磨きして丸太を生産していきたく」と、杉和金の吉岡英昌さん(36)。建築業界の厳しい冬の中に、春を待つ若者を買った気がします。



(銘木賞賛)